新約聖書の奥義　第 25 回
「奥義としての神の国」の特徴を教える９つのたとえ話　①

□はじめに（前回「たとえ話による教え」の要旨）

1.　「奥義としての神の国」の特徴を教える 9 つのたとえ話

イエスは、イスラエルの指導者層から公式にメシアではないと拒否された日、その日のうちに、９つのたとえ話を語った。群衆に対して５つ、その後で弟子たちだけにさらに 4 つ、合計９つである。この一連のたとえ話は、奥義としての神の国の特徴を教えるためのものである。マタイ 13 章、マルコ 4 章、ルカ 8 章に記されている。

2.　たとえ話のテーマと、たとえ話で語る目的

マタイ 13：11　*あなたがたには天の御国の奥義を知ることが許されていますが、あの人たちには許されていません。*
マルコ 4：11　*あなたがたには神の国の奥義が与えられていますが、外の人たちには、すべてがたとえで語られるのです。*

マルコ 4：33～34　*イエスは、このような多くのたとえをもって、彼らの聞く力に応じてみことばを話された。たとえを使わずに話されることはなかった。ただ、ご自分の弟子たちには、彼らだけがいるときに、すべてのことを解き明かされた。*

(1)　たとえ話のテーマは、**奥義としての神の国**である。
(2)　このテーマをたとえ話の形で語るのは、あたかもイラストで見せるかのような効果がある。もちろん、そのイラストが何を指しているのか、明確に知るためには、解説が必要である。イエスは、群衆にはたとえ話で語り、弟子たちにはそれに解説を加えた。
(3)　よって、たとえ話で語る目的の第一は、弟子たちには視覚的に理解させるためである。第二の目的は、メシアを拒否した邪悪な世代には、その情報を隠すためである。なぜなら、イエスをメシアとして信じる信仰を持っていることが、その情報を受け取る条件だからである。

3.　一連のたとえ話を理解する鍵は、一つ目のたとえ話「種まき」にある

マルコ 4：13　*そして、彼ら*（弟子たち）*にこう言われた。「このたとえが分からないのですか。そんなことで、どうしてすべてのたとえが理解できるでしょうか。*

７月は一つ目のたとえ話「種まき」、８月と９月で残り８つのたとえ話を学びます。

９つのたとえ話の第一　「種まき」

1. 種まきのたとえ話（マタイ 13：3～9）

見よ。種を蒔く人が種蒔きに出かけた。
蒔いていると、種がいくつか道端に落ちた。すると鳥が来て食べてしまった。
また、別の種は土の薄い岩地に落ちた。土が深くなかったので、すぐに芽を出した。
しかし、日が昇ると焼けて、根がないために枯れてしまった。
また、別の種は茨の間に落ちたが、茨が伸びてふさいでしまった。
また、別の種は良い地に落ちて実を結び、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍になった。
耳のある者は聞きなさい。

2. たとえ話のテーマ（マタイ 13：11、マルコ 4：11）

マタイ 13：11
あなたがたには天の御国の奥義を知ることが許されていますが、あの人たちには許されていません。

マルコ 4：11
あなたがたには神の国の奥義が与えられていますが、外の人たちには、すべてがたとえで語られるのです。

「奥義」とは、旧約聖書では知られていなかったが、新約聖書で明らかにされたことを意味する。
「神の国の奥義」とは、神の国について、旧約聖書で知られていた神の国の４つの層とは別に、このときイエスが初めて明らかにした第五の層がある、ということである。
イスラエルの指導者層がイエスをメシアではないと拒否した日、旧約聖書では知られていなかった【神の国の第五の層】が、始まった。これが「奥義としての神の国」である。
では、「奥義としての神の国」は、どのような時代的特徴を持っているのか。それが、たとえ話のテーマである。
しかし、たとえ話だけでは、聞いた者は理解できない。

マルコ 4：34
たとえを使わずに話されることはなかった。ただ、ご自分の弟子たちには、彼らだけがいるときに、すべてのことを解き明かされた。

イエスは、弟子たちには、解説を加えた。

3. メシアによる解説（マタイ 13：18～23、マルコ 4：14～20）

マタイ 13：18～23
ですから、種を蒔く人のたとえを聞きなさい。
だれでも御国のことばを聞いて悟らないと、悪い者が来て、その人の心に蒔かれたものを奪います。道端に蒔かれたものとは、このような人のことです。
また岩地に蒔かれたものとは、みことばを聞くと、すぐに喜んで受け入れる人のことです。
しかし、自分の中に根がなく、しばらく続くだけで、みことばのために困難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまいます。
茨の中に蒔かれたものとは、みことばを聞くが、この世の思い煩いと富の誘惑がみことばをふさぐため、実を結ばない人のことです。
良い地に蒔かれたものとは、みことばを聞いて悟る人のことです。本当に実を結び、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍の実を結びます。

マルコ 4：14～20
種蒔く人は、みことばを蒔くのです。
道端に蒔かれたものとは、こういう人たちのことです。みことばが蒔かれて彼らが聞くと、すぐにサタンが来て、彼らに蒔かれたみことばを取り去ります。
岩地に蒔かれたものとは、こういう人たちのことです。みことばを聞くと、すぐに喜んで受け入れますが、自分の中に根がなく、しばらく続くだけです。後で、みことばのために困難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまいます。
もう一つの、茨の中に蒔かれたものとは、こういう人たちのことです。みことばを聞いたのに、この世の思い煩いや、富の惑わし、そのほかいろいろな欲望が入り込んでみことばをふさぐので、実を結ぶことができません。
良い地に蒔かれたものとは、みことばを聞いて受け入れ、三十倍、六十倍、百倍の実を結ぶ人たちのことです。

4. 奥義としての神の国は、どのような時代的特徴を持っているか

(1) この国の時代的特徴は、福音の種まきがされることである。

(2) その種まきは、3 つの妨害を受ける。

① サタンからの妨害・・・4 節「鳥」＝19 節「悪い者」＝サタン（マルコ 4：15）とその配下の悪霊たち

② この世からの妨害・・・21 節「困難や迫害」

③ 内なる肉（罪の性質）からの妨害・・・22 節「この世の思い煩いと富の誘惑」

(3) その種まきには、異なる土壌が準備される。この世（人々、地域、国）が一様に反応するのではなく、ある部分は、他の部分よりも、福音の種まきに対して良く応答する。土壌（応答）の種別は４つある。

① 道端

② 岩地

③ 茨の生えた地

④ 良い地

(4) その種まきは、4 つの応答を受ける。第一は不信仰の応答、第二から第四は信者の応答である。

① 道端の応答：　不信仰の応答。福音を聞いても信じない人

② 岩地の応答：　この人は、福音を聞いて、それを信じて救われた人である。
しかし、神のことばに根差すことなく、不安定である。
教えの風に吹かれて、ふらふらするような信者である（エペソ 4：14）。
体験重視に傾きやすいので、体験がアップダウンするのに応じて、信仰生活もアップダウンしてしまう。
神のことばに根差さないので、信者として結ぶべき実を結ぶことができない。
いつまでも、「固い食物」を受けつけず、「乳」（初歩的な教え）ばかり飲む。

③ いばらの地の応答：　これも信者の応答である。
しかし、この人の胸の内には、この世の思い煩いがいっぱいに詰まっている。
この世のことをあれこれと心配するところから一歩も抜け出せないでいる。
岩地の信者とは違って、神学的な知識はある程度持っていて、体験重視には陥らない。しかし、神のみことばに従った霊的な生き方をすることはできない。なぜなら、この世の思い煩いの中にいるからである。
その結果、岩地の信者と同じように、不安定で、実を結ばない。
このような信者もまた、「乳」の段階から成長しない。

④ 良い地の応答：　信者の応答、しかも神のみことばに根差した信者の応答である。
彼らはこの世の思い煩いを捨て、この世に対して勝利した。
その結果、彼らのスピリチュアル・ライフは、豊かな実を結ぶ。
彼らは、乳から固い食物へと進んだ信者たちである。